

第8回「ことば」フォーラム

ネット・コミュニケーションと「ことば」

2002年1月19日（土）

立川市女性総合センター 1階 アイムホール

三宅 和子（東洋大学）

池田理恵子（国立国語研究所）

加藤 安彦（国立国語研究所）

杉本 明子（国立国語研究所）

共催：立川市

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会（植木） それでは、定刻を若干過ぎてしまいましたけれども、ただ今より国立国語研究所並びに立川市の共催ということで、「第8回ことばフォーラム、ネット・コミュニケーションと「ことば」」を開催いたします。私は、本日司会を務めます国立国語研究所、植木正裕と申します。どうぞよろしく願いいたします。（拍手） まず、初めに、皆さん御手元に多分資料がいつていると思いますので、資料の確認だけさせていただきます。このような水色の封筒を受付でお渡ししていると思いますが、その中に、まず一つ、ホチキスで止めてある「ネット・コミュニケーションと「ことば」」と書いてある本日の資料、これと、上に「質問票」と書いてあります黄色の紙、それから、「ことば」フォーラム・アンケート」という緑色の紙、それ以外に、国立国語研究所の様々な活動に関わる資料等が入っています。なお、後ほどもまた御説明いたしますが、この黄色い質問票につきましては、途中、休憩時間中に回収させていただきまして、第2部の討論の場で取り上げたいと思いますので、どうぞ協力をよろしく願いいたします。それから、このような会では、よく携帯電話の電源をお切りくださいということをお願いするわけですが、本日は、携帯電話のメールのことなども話題として取り上げますので、そのようなお願いはしないということで我々のほうでは方針を決めております。ただ、着信音が鳴ってしまいますと、ちょっと他の方にも御迷惑になるかと思しますので、着信音のほうだけお切りくださるよう、お願いいたします。では、初めに、国立国語研究所長甲斐睦朗より御挨拶申し上げます。（拍手）

甲斐 国立国語研究所は、昨年1月から独立行政法人として新しい出発をいたしました。そして、続いて、平成17年には立川に移転いたす予定になっております。私どもと同じく立川に移転予定の国立機関として、ほかに、国文学研究資料館、極地研究所、統計数理研究所の3機関があります。将来は敷地を接して研究を推進していくこととなります。そこで、昨年、立川の地で、立川市と共催で何かをしようという話がまとまりました。昨年の夏は、他の3機関と共同で所長が講演をするという形をとったわけですが、今回は、国立国語研究所が独立して、「ことばフォーラム」を開催することで、立川市のほうから共催でということをおっしゃっていただきました。また、今日は、市長がお忙しい中を挨拶においでくださいました。まことにありがたいことあります。私どもは、これまで50年のあいだ、様々な面から日本の言葉について研究をしてまいりました。それを、できるだけ国民の皆様に還元するというので、この「ことばフォーラム」を開催します。また、表の所には、「ことば」シリーズという冊子を並べております。値段は安くて内容は大変よいものでありますので、是非ご覧いただきたいと思っております。また、啓発ビデオも作成いたしております。今日のフォーラムは、ご覧のように、また司会者の若さを見ましても、ネット・コミュニケーションという、私どもの年代では思いつかないような、非常に現代的なテーマを組んでおります。私も今

日はしっかり聞いて勉強しようと思っっているわけでありませう。私はメールを使っってはありませうけれども、顔文字はまだ使っったことがありませう。これから2時間ですけれども、できるだけ新しいところを、新聞もテレビも、そういう新しいところに関心を寄せてありますので、その最先端のところを、今日の国立国語研究所の若い研究員が力を合わせて発表するところをお聞きいただき、是非御質問等をいただきたいと思っいます。以上、最初にあたりまして、御挨拶いたしました。（拍手）

司会 続きます、今回は立川市と共催ということで、大変いろいろ立川市の方々には御協力いただきました。次に、立川市長の青木久様よりご挨拶を頂戴したいと思います。よろしくお願ひいたします。（拍手）

青木市長 立川市長の青木でございます。今日は、国語研究所の主催でこのような「ことばフォーラム」が立川で開催、実行できるということは、本当に立川市にとりましても大変名誉でございますので、共催という形で参加させていただきました。立川は、御承知のように、52年に米軍基地の返還、これがあっったおかげでこのような町になりましたし、また、こういう国語研究所ほか、文部省の研究機関がそれぞれ立川に来るということです。最初は、東大が来たいとか、あるいは都立大が来たいとか、いろいろ私のほうに申し出があっただけでございますが、最終的には、今は総務省が管轄する自治大学と、それから文部省の4機関、これが立川に来るとこういうことになりまして、自治大学は来年の春4月に開学にむけて、今一生懸命工事が進んであります。所長さんのお話にありましたように、国語研究所は、平成17年に開所になるそうでございます、我々は本当に期待しているわけでございます。しかし、内容がどうあるのかということをお我々をはじめ市民が、非常に期待はしながらも分からないというような点も多かつたわけでございますが、もうここにおいでになることを前提に、こういうふうなフォーラムを立川で開催していただくということは、本当に我々としてはありがたいことでございます、心から感謝申し上げるとともに、共催という立場で参加させていただいているわけでございます。今、駅前も工事がずうっと進んでありまして、デッキがそれぞれ伸びてきてあります。この7月までには、高島屋まで直通のデッキを伸ばす予定になっておりますから、そうしますとこの場所も、じかに来るのに非常に楽になります。この「アイム」というのは、これはご婦人専用というわけではございませうので、男の人でも十分利用できるわけでございますから、御利用いただいて、こういう会を大いに進めていただきたいと、心から願ひわけでございます。まちづくりとともに、文化の面でも、私たちが大いに力を入れていきたいと思っいますので、今日の催し事は立川市民としても本当にありがたいことでございます。今後ともよろしくお願ひしたいと思っいます。今日は大変御苦勞さまでございませう。ありがとうございませう。（拍手）

司会 どうもありがとうございませう。続きます、本日のフォーラムの内容について、国立国語研究所の山崎誠のほうから御説明申し上げます。

山崎 本日は「ことばフォーラム」によろこそおいでくださいました。今回の企画を担当させていただきます山崎と申します。よろしくお願ひします。ごく手短かに今日の趣旨を申し上げます。今、テレビを見ても、新聞を開いても、インターネットという言葉聞かない日はないぐらいにネット社会という時代を迎えていますけれども、それに伴って、電子メールや携帯でのメールというのが急速に広まっています。恐らく皆さんも耳にしたことがあると思うのですけれども、今、電子メールというのを、「電子」をとって、単にメール、メールと言っている方が多いのでも分かりますように、非常に日常的な伝達手段になってきています。それが本当に市民のあいだに息づいて、皆が便利で豊かになるようなそういう社会が築ければいいのですけれども、実際にはまだ情報格差とって、使っていらっしやらない方には非常に敷居が高い、そういう面があるかと思ひます。その実態を、皆さんがちゃんと使えるようにというとおこがましいのですけれども、今若い人はどう使っているか。職場で、自宅で、学校で、どういふふうな使われ方しているかというのを紹介していただき、それをもとに、皆が豊かな電子情報化社会を迎えるという、そのような趣旨で開催をいたしました。今日のフォーラムの構成を簡単に御紹介します。まず、これから4人の方々に、ネット・コミュニケーションに関する話題を御紹介していただきます。その後休憩を挟みまして、第2部では、より深い討論というかもっと、第1部では触れられなかった話題とか身近な体験談とかいろいろな興味深い話題を含めて、第2部で皆さんからの質問を受け、それにお答えしつつ進めていきたいと思ひます。以上、非常に短い、2時間足らずなのですけれども、今日は楽しい会にしたいと思ひますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

(拍手)

「新聞記事からみたメディアの変化と意識の変化」池田 理恵子

(配布資料：p. 2～4)

司会 これ以降は、台の下から失礼いたします。まず初めの話題についてですが、「新聞記事からみたメディアの変化と意識の変化」というタイトルで、国立国語研究所の池田理恵子のほうからお話をいたします。

池田 国語研究所の池田でございます。今日は、「新聞記事からみたメディアの変化と意識の変化」ということでお話をいたします。取り上げるのは二つのことです。最近、年賀状の代わりに電子の年賀メールを送ることが増えてきたというような新聞記事も見られますけれども、年賀状は今までどういふ道具を使って書かれてきているのかというようなことを取り上げます。それから、後半では、電話が千八百何年だったかにサービスが開始され、電話が普及して、携帯電話が広がってきて、それが今では携帯メールがたくさん使われるようになってきているという、過去50年の変化について見ていきたいと思ひます。2001年11月30日の読売新聞には、こういう記事が載っています。「年

賀状を出さない人が11%、この人たちのうちの4人に1人が電子メールで年賀メールを出すと答えていた」という記事です。これは、筆記具メーカーのパイロットが調査をして、首都圏に勤務する20代から50代の男女400人が回答しているのですけれども、この2001年の調査で22回目になります。過去の調査、新聞記事に掲載されていた記事を基に過去どういうふうになら、どういった筆記具を使って年賀状を書いたのかということを見てみます。年がちょっとばらばらなのですが、1980年、94年、99年、それぞれの年の年賀状をどういったふうになら作っていたかということ、1980年は万年筆が35%ぐらい、1994年になると、パソコンやワープロを使ったというのが7%出てきます。1999年の年賀状では、パソコン、ワープロは20%に増えています。1980年に7%の人が毛筆で書いてましたが、1990年代になると上位には上がってこなくなります。1950年ころは、履歴書を書くのも毛筆、縦書きだったというようなことがありまして、まだ1980年の時点では、改まった年賀状を書くには毛筆を使おうというふうになら意識していたのではないかなと思われま。1990年ころから、パソコン、ワープロを使って年賀状を作るといった人が増えてきてはいるのですけれども、最初から使いたいという意向が大きくなっていたわけではなく、1990年ころは、「あっても利用したいと思わない」といった人が6割前後いました。それが1996年に初めて、「あれば利用したい」といった人が半数を超えました。利用したいと思う理由は、「オリジナルのデザインが作れる」といった人が42%、「手書きは汚い」といった人が20%で、どちらかということ、積極的に自分の表現をするためにパソコンやワープロを使いたいというような意向が見てとれます。最近では、パソコン、ワープロの他に、プリンター、スキャナー、デジタルカメラなどを使って年賀状を作成する人が増えてきています。これは、キヤノンが首都圏と関西圏の20代から30代の人を対象に調査した結果です。そのホームページのアドレスは資料の上のほうに書いてありますので、もし御興味があれば、インターネットを使ってご覧いただけるかと思いま。1999年から2002年にかけて、パソコンやデジタルカメラなどを使って、デジタルの年賀状を自分で作るという人は59%から76%に増えています。この人たちも、「好きな画像を使用した年賀状を作りたい」といった積極的な意欲を持って使っている。ただ単に宛名を書くとか、便利にならっている、パソコンを使って大量になら作れるというだけではなく、積極的に自己表現したいこうという感じがありそうです。では手書きと、そういう機械を使ったものとなら、年賀状についてどういった意識を持っているかを新聞記事で見ると、「下手でも心を込めて」手書きにしたいとか、「一言でも肉筆を添えて」、手書きの部分がある年賀状がうれしいということ、作るのデジタル機器を利用した年賀状が便利だし、自己表現もしやすいということはあるのですけれども、もらってうれしいのはやはり手書きであったり、手づくりの年賀状だというふうになら意識しているよう。では、作る側でどういったふうになら配慮しているかということ、年賀状の全体はデジタルで作ったとしても、近況報告や自分の名前、あるいは宛名などは手で書こうとい

うふうに、少しでも手書きの部分を加えることで配慮しているようです。宛名は自分で手で書くという人は、2001年の年賀状では6割、2002年の年賀状、このお正月に届いた年賀状ですね、その時には51%で、この1年で少しポイントが下がっています。宛名もワープロ、パソコン等でデータをそのまま打ち出しているというものが少しずつ増えてきているのかもしれませんが。皆さんのおうちに届いた年賀状はいかがだったでしょうか。紙のはがきの年賀状をこれまで見てきたのですけれども、最近増えているインターネットを使った年賀メールはどうかというと、使用経験があるという人は、1999年に12%、2001年の年賀状の時には43%でした。携帯メールを使った年賀メールもありますけれども、「お年玉くじ付きの電子年賀状」というウェブサイトがありまして、1996年に開設されて、1997年の利用が150万通というふうに、近年のことですが、電子メールの年賀状が非常に増えてきています。「経験ないが、今後使いたい」という人は37%から44%に増えていきます。一番下の「もらってうれしい」というのは、1999年には0.6%でしたが、2002年の年賀状について聞いた時には27%と、かなり増えてきています。このように年賀メールは増えてきているのですけれども、意識も様々なようです。これは2001年1月8日の朝日新聞の「声」欄に掲載された高校生の投書ですが、「年賀状は25日ころまでに出さないと元日に届かない。それに対してメールは安くて、送るとすぐに相手に届くので便利だ。友だちも年賀メールを出すと言っていたので、自分も年賀メールを出すことに決めた。皆に年賀メールを送ると言ったので、年賀状がいつもより少なかった。もの悲しくて、毎日毎日メールは使っているのだけれども、お正月からは古風にはがきの年賀状を出そうかなと思った」という記事です。この投書には、携帯を持たない友達や、中学、高校の先生にははがきの年賀状を書くと言われている、相手によって使い分けをするという意識も見られます。また、年賀メールは便利なものだと思っていたけれども、はがきの年賀状に対する思い入れというか、揺り戻しのようなことも意識されているようです。これまで見てきたように、はがきの年賀状を作る時の筆記具は、毛筆から万年筆、サインペンへと変わってきましたけれども、どういう筆記具を用いるか、あるいははがきで出すのか、電子メールで出すのかということ、相手によって、あるいはその人がどういうふうに伝えたいのかということ、使い分けをしているとも言えそうです。それでは、次に、電話、あるいは携帯電話、携帯メールについて、人々の意識がどのように変化してきたのか見てみましょう。1960年代から2001年の末まで、新聞の投書欄から拾って、資料の3ページから4ページに示しました。このデータは、私が所属している研究室に、過去50年以上にわたって、言葉の使い方や意識について書かれた新聞記事の切り抜きを集めたものがありまして、そのデータの中から選び出してきたものです。1960年代、70年代ころというのは、電話は一家に1台でした。それがその後普及しまして、一部屋に1台ある、あるいは子機という持ち運びが可能なものが出てきました。電話が最初に広まりだしたころには、用件を伝える手段とし

て、長電話はよくないというようなマナー意識に縛られていた感じもあったものが、だんだん普及してきて、電話で話すことを楽しむという形の通話も広まってきているようです。1987年に携帯電話のサービスが始まって以来、携帯電話、あるいは携帯で文字メールを送る携帯メールというものも広まってきて、最初に使っていた人たちから、老年層ですとか、中学生、高校生、あるいは小学生にまで利用者層が拡大してきています。その一方で、公衆電話の数が減って不便になったという、携帯電話を持たない人たちの不満の声というのも新聞には見られます。携帯電話というのは、持ち運びが可能になって、直接その相手につながるということで、いつでもどこでもかけられることを、利点ととらえることもできるのですけれども、一方では利用マナーに関する投書も非常に多く、例えば病院ですとか、運転をしながらの携帯メールの使用については批判の意見も出てきます。それから、使用場所や状況についての意見だけではなくて、携帯メールを使う、あるいは携帯電話を使うことでコミュニケーションが深まったり、狭まったりするという意見もあります。例えば4ページの上から2行目に1999年10月11日の「ネット社会の孤独感、目の前の相手との会話なし」という記事があります。目の前に人がいるのに、携帯電話あるいは携帯メールを使っていて、目の前の人とコミュニケーションをとらない、物理的な空間は共有しているのに、その人たちとやり取りがないというような負の側面が指摘されています。その一方でということで、離れた場所にいても直接相手と話ができるということで、共感を深く持つ、コミュニケーションが深まるということもあるようです。やり取りをする手段、道具が、電話、携帯電話、携帯メールというふうに複数化してくると、誰に対してどういう手段、道具を使うのか、使い分けということも出てきています。それぞれに特性があるようではありますけれども、例えばお礼の場合は、電話で済ませるのではなくて、手紙で書いたほうがよいのではないかという意見ですとか、たまには電話をやめてみようという意見ですとか、用件は電話で言って、手紙は心を込めて書こうというような投書も見られます。ここでは一つひとつ投書を取り上げてお話しすることができませんでしたが、ここに取り上げられた内容をご覧になって、これから携帯電話、携帯メールなどの道具を使って豊かな情報化社会をつかっていくためには、どういうルールをつかっていったらいいのか、配慮をしたらいいのかということを考えていただきたいと思います。では、これで私の話を終わらせていただきます。（拍手）

「若者のケータイ・メール利用」 三宅 和子 （配布資料：p. 5～8）

司会 では、次の話題ですけれども、タイトルは「若者のケータイ・メール利用」ということで、東洋大学の三宅和子先生にお話をいただきます。よろしくお願ひします。

三宅 国立国語研究所の所員に混じって変な者がいますけれども、東洋大学の三宅と申します。私の担当は携帯電話のお話なのですが、特にメールを使った若者のコミュニケー

ションについてお話ししたいと思います。あとのほうで図でご説明しますが、まずは皆さんの御手元の紙でたどっていただきたいと思います。ここで話すのは、まず若者の携帯電話のメール利用の実態について、そして、若者のコミュニケーションの特徴と変化について、時間があれば、これからの携帯電話の利用の可能性などについてお話ししたいと思いますけれども、多分ないと思うので、後のディスカッションでお話できればと思っております。皆さんもご存じのように、携帯電話は、ここ5年ぐらいで大変急速に普及いたしました。野村総合研究所というのがそういった情報通信利用者の動向を調査しているのですが、去年の12月の報告によりますと、生活者の4人に3人は携帯電話を持っており、若者に至っては90%以上が用いているという結果があります。そういうわけで、本当に私たちの中で、携帯電話がもう普通の生活の一部になってきているというふうにいえるのではないかと思います。先ほども池田さんのほうからちょっと御紹介があったので、その次の所は簡単にいきたいのですが、携帯電話の特徴を考える時に、今までの電話の利用の変化と比較して考えるのが一つのいい方向だと思うのです。先ほどの記事にもありましたけれども、大体1960年代には一家に1台というふうには、電話がございませんでした。電話を利用する時には、近くの電話のある所に取り次いでもらったり、公衆電話を利用したり、そういう形で電話を使っていたのですが、60年代後半から70年代になって、一家に1台が実現しました。その時でも、電話というのは玄関とか特別な場所に置いてあったのですけれども、それがだんだん居間のほうに入ってきて、皆さんの生活の中に溶け込んでいくという、そういう形が実現しました。それから、今度は寝室とか子供部屋に子機を置きまして、そこで個人的に電話ができるような形ができた。それがもっと進化しますと、今度は家じゅう動きながらポータブルで電話がかけられる。この変化というのは、まだ過去10年ぐらい前でしたらそういうレベルだったと思うのです。この変化を考えますと、電話の進化というのは、個人化、つまり一人が自分で使うという一つの変化と、それから、動けるという変化だというふうに考えられるんですね。携帯電話を考えますと、その両方を持っている。一人一つずつ、そしてどこにでも動ける。そういう、いわゆる電話の進化の方向性の端に携帯電話があるというふうに考えたらいいのではないかと思います。それでは、携帯電話というのはどういう特徴があるか、もう一度整理し直してみたいと思います。さっきも出てきましたけれども、まずモバイル、移動できるということですね。今までの家の中の子機の場合は、家の中は移動できましたが、外に出たら使えなくなることが多かった。携帯の場合は、いつでもどこでも使える。そういうモバイルというのがやはり一番強い力を発揮していると思います。それから、パーソナルでプライベート、これは、さっきも言いましたが、一人1台ですね、ですからパーソナルである。それから、家庭の中で使うのと違って、自分一人で聞くことができる、話すことができる。そういう意味でプライベートであると。それから、コンパクト、だんだん小さくなっていますけれ

ども、小型ですから、バッグの中とか、腰に、ポケットに入れたりして持ち運べる。そういう形で、体に密着した形で持っていることができる。私の教えている学生なんかは、もう携帯が放せないんですね。肌身離せないものですから、お手洗いにいく時も、それからお風呂に入る時も持って行って使っている。お手洗いにいっているあいだに携帯が鳴ってしまったら困るという、それぐらいもう本当に自分の生活の中に、もう体の一部に近い状態になってきているということがあります。それが携帯電話なのですけれども、今若い人は携帯電話なんて言いませんよね。大体「携帯」と言っていて、それもイメージとしてはカタカナの「ケータイ」です。この、携帯電話からケータイへの変化というか違いというのは、やはり携帯がメールが使えるということ、それから、その他のいろいろな機能があって、マルチメディア化しているということがいえると思うんですね。その次のページをあけていただきたいと思います。マルチメディアってどういうことかという、いろいろなメディアが集まっているということですが、携帯というのはもちろん電話機能で、話す、聞くということができるのですが、メール機能がついていて、読む、書くということもできるわけですね。それ以外にどういうことができるかという、例えば辞書機能があって、分からない漢字を引くこともできますし、読むこともできます。それから、多分今一番そういうのが使われていると思われるのが情報機能なのですけれども、例えば学生なんかはもう今時計を持っていない人が多いんですね。なぜかという、携帯で済む。携帯はもう体の一部ですから、携帯で見ればもういいわけで、わざわざ時計を別に買う必要はないと、そういうことがあります。それから、お店の情報もたくさん携帯でとることができます。それから、新しい音楽をダウンロードすることもできます。それから、知らない所へ行って地図を調べることもできますし、天気予報とかいろいろな情報をとることができます。それから、もう一つは、サービス機能として、例えば銀行振込とかショッピングをするという、こういうこともできまして、皆さんが今持っていらっしゃるハンドアウト（p 6）の所でいえば、「電話機能」以下、電話の下の「メール機能」からあとは全部パソコンで今までできていたもの、そういったものが携帯でもできると。そうしますと、携帯の全体的な機能としますと、持ち運べるパソコン、持ち運べる大変小型のパソコン、プラス電話機能というふうに考えていけばいいのではないかと思います。そういった大変便利になった携帯、それを、では若者はどういうふうに使っているのだろう。そういうことをもう少し詳しく見ていきたいと思います。昨年私の大学で調査したもの（p 8 資料）ちょっとお見せしたいと思いますけれども、簡単なことを聞いているのですけれども、どのような時に携帯を使いますかというふうなアンケートをしました。そうしますと、やはり一番多いのが「連絡用件」につきますね。その次に多いのが、「暇な時」というのが出てきているのですけれども、ちょっと藤色というカラベンダーみたいな色をしたほうが、音声通話のほうがですね、電話として使っているもの、それからワインレッドみたいなこちらがメールのほうです。

そうしますと、「連絡用件」というのはかなり両方とも多いのですけれども、どちらかというに通話のほうが多いですね。これは、実はいろいろ調べてみますと、つまり連絡とか用件というのは、例えばおうちの人に、帰りにパンを買ってきてというのがあったり、今日のご飯は要らないよとか、そういった用件、そういった場合にはすぐに聞いてほしいわけで、そうしますと電話というか通話のほうが便利なんですね。それから、所在というのは、例えば待ち合わせなんかの時、これもすぐにお互いに分からなければ、今伊勢丹の前とかいうのをメールで打っていてもしようがありませんから、これも電話が多いんですね。ところが、もう一つ面白いのは、若い人で「暇な時」というのがありまして、これは例えば授業中なんか、先生の話、面白くないなとか、時々待ち時間とかいろいろありますよね。そういう時に、メールをポンポンと打つわけなんですね。そういうのはもう完全にメールが多い。そういうのは、電話はすごく少ないということがあります。それから、どんな相手にといいことを聞きました。そうしますと、やはり一番多いのが「友人」なんですね。しかしながら、友人ですと少しばかりメールのほうが多い。それに反しまして、「家族」には電話が多いんですね。これは、さっきも言いましたように用件を家族に伝えることのほうが多くて、その場合には早いほうがいい。それからもう一つは、両親に通話することが多いのですが、両親はメールは使えないと。電話は使えるけれども、メールは使えない。そういうことがありまして、電話が多くなっています。面白いのが、旧友とか、普段会わない友、そんなに多くないのですけれども、これはメールが多いんですね。これは、いろいろまた聞いてみますと、ふだん会わない人に「どうしてる、元気？」みたいな、そういう話をする時には、メールのほうが軽くてやりやすいと、そういうふうな回答がありました。それから、3番目には、ではどういふことをお話しているのかということ調べました。そうしますと、先ほどのように「連絡用件」についてが多いのですけれども、同じようにやはり家族なんかの場合の連絡が多いですから、音声が多いです。それから、所在も、先ほど言ったように、どこにいるのかということやはり電話を使ったほうがいいですね。これ、近況、日常というのはどういふことかということ、それこそ「今何してる？」とか、また、大学のことでいえば、「この先生の期末のテスト、いつだった」とか、そういうことを、もう本当にどうでもいふようなことなのだけれども。それから、今何かやっていることを実況するとかね。僕の前にいるだれさんがどうしているとか、そういう本当に連絡しなくてもいいようなことなのだけれども、実況中継するという、そういったことがメールでたくさんされています。こういうのを全部合わせて考えてみますと、メールというのは、極端な言い方をしますと、家族に対しては特に連絡とか用件がある時にその内容を伝えるように使われる。それから友人などに対しては、暇な時に、今の気持ちとか、今やっていることとか、そういったことを実況中継するということが特に顕著に見えるように思います。では、なぜ若者は携帯メールをよく使うのでしょうか。それは、まず安いんですね。

使っていらっしゃる方は分かると思うのですけれども、ただであったり、今は大体パック料金で月額が払われていますから。それにメールはもうタダであるとか、メールの通話だったら、普通の電話の通話と比べて大変安いんですね、そういうのでメールが多くなる。しかし、それだけではないんですね。先ほどのモバイルのこともありましたように、時間や場所を問わず、自分も相手も都合のいい時に交信できると。つまり、最近よく大学で私語が少なくなったというのですが、それは別に学生が熱心に聞くようになったのではなくて、先生の余り目に見えない後ろのほうでは、大変に多くの携帯メールが飛びかっているわけなんですね。だから、先生は安心してはいけません。ですから、相手もメールをいつでももらえるし、いつ見てもいいわけですね。都合が悪い時は見ない。例えばゼミの小さい教室でやっている時に、先生が目を光らせていますと、その時は見ないで後から見るということもできる。それから、私的で個人的。これは携帯電話の特徴なのですが、周りに見られずに、そして聞こえずに、聞こえずにというのはこれはまた一つのポイントで、昔は、昔って本当に数年前までは、電車なんかでもうるさかったですよね、若い人たちの話というのが。今はほとんどありませんよね。今ひんしゅくをかっているのは、中年ぐらいのビジネスマンで、大きな声で電話をかけていたりしますね。今は本当に若い人は、ほとんどの人がメールになってしまったと思います。そういうわけで、見られずに、聞こえずにということがある。それから、自分のペースでかける、つまり、やはり相手にいやな思いをさせたくないとか、いろいろ気は遣っているわけで、メールですと書き直しがききますし、言葉も選べるんですね。そういったことで大変に便利だと。もう一つは、相手の反応がすぐ見えない。ということは、余りその時に気を遣わなくていい。それから、間接的というのもそうなのですから、顔も見えず、声も聞こえませんから、そういう心配、つまりコミュニケーションというのは結構対面だと大変なのですが、そういう心配をしなくてもいいということがある。そういうことを全部総合しますと、若者の携帯メールによるコミュニケーションってどういうものかといいますと、やはり頻繁にコミュニケーションがなされているのだが、濃い関係ではない。つまり、気配りの負担が少なく、気後れせず、相手にも負担をかけないような、やさしいゆるやかな関係をここで構築しているのではないかというふうに思われます。ちょっとしり切れとんぼになりましたけれども、時間が押しているようですので、また後でディスカッションのところでお話したいと思います。ありがとうございました。

(拍手)

「インターネットを利用したグループ・コミュニケーション」杉本 明子

(配布資料：p. 9～13)

司会 次の話題ですけれども、国立国語研究所の杉本明子のほうから、「インターネットを

利用したグループ・コミュニケーション」と題しましてお話を紹介させていただきます。
(拍手)

杉本 国立国語研究所の杉本でございます。どうぞよろしくお願いたします。私は、インターネットを利用したグループ・コミュニケーションについてお話いたします。2001年度版の「インターネット白書」によりますと、日本国内におけるインターネットの利用者は3,000万人を突破し、今後も利用者が増加するというふうに推定されています。インターネットの利用内容は、現時点では電子メールやウェブでの情報収集が中心ですが、今後はインターネットを利用して、多くの人々とグループでコミュニケーションしていきたいという人が増えているというふうに予想されています。私の発表では、次のことについて皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。まず第1は、インターネットのグループ・コミュニケーションは、対人関係やコミュニケーションの環境という点から、従来のコミュニケーションとはどのように異なっているのだろうかということです。第2は、インターネットを利用したグループ・コミュニケーションの形態にはどのようなものがあるのだろうかということです。第3は、インターネットによりグループ・コミュニケーションにはどのような特徴、利点、問題点があるのだろうかということです。それでは、まず第1のトピックについて考えてみたいと思えます。インターネットのグループ・コミュニケーションを、従来の対面や電話でのコミュニケーションと比較いたしますと、まず、第1の特徴としてあげられるのは、時間や場所の制約がないということだと思われまます。例えば、今日私は、こうしてここアムホールで皆さんと対面、直接会ってお話させていただいているわけなのですが、このように直接対面でお話するためには、ここアムホールという同じ場所で、しかも同じ時間にお会いしなければなりません。私が新宿にいたり、あるいはいくらアムホールに来て、午後5時に来たのでは皆さんと対面でお話することができません。電話を使いますと、場所の制約がなくなりますので、遠くの人同士でもお話することが可能なのですが、同じ時間に話さなければならないという時間的な制約はあります。それに対して、インターネットを利用したコミュニケーションの場合は、相手が新宿にしようとアメリカにしようと中国にしようと、場所に関係なく対話をすることができます。また、自分にとっても相手にとっても都合のいい時間にコミュニケーションすることができて、大変便利です。次に第2の特徴としてあげられるのは、情報伝達の即時性、つまり、情報をすぐに相手に伝えられるということです。手紙の場合を考えますと、確かに世界中の様々な地域の人と都合のいい時に手紙をやり取りすることは可能なのですが、時間がかかってしまいます。日本の場合でも、離れた場所の人に手紙を送りますと届くまでに2~3日かかってしまいますし、海外ですと1週間から数週間かかるということもございませす。それに対してインターネットを利用すると、外国にいる友人にも数秒から数分後にメールを送ることができます。このことから、コミュニケーションがスムーズに進んでいく

というふうを考えられます。インターネットのグループ・コミュニケーションの第三の特徴としてあげられるのは、多くの人との双方向的コミュニケーションが可能だということです。コミュニケーションをする相手との関係を考えますと、こちらの画面の、皆様から向かって左手にございますように、1対1でコミュニケーションする場合と、右手にありますように一度に多くの人々に情報を伝達する場合があります。私たちの日常生活においては、対面や手紙では、何十万、何百万の人に同時に同じ情報を送るということはまずあり得ませんが、テレビや新聞、ラジオなどのマスメディアには、一度に何万、何十万、何百万の人に同じ情報を送ることが可能です。しかし、その情報の伝達は一方的なものです。例えばテレビの場合ですと、テレビ局からお茶の間にいる私たちのほうに情報は送られてきますけれども、お茶の間にいる私たちからテレビ局へ情報を送ったり、あるいは他のお茶の間にいる視聴者の人に情報を送るということではできません。それに対してインターネットのグループ・コミュニケーションでは、誰でも自由に多くの人に情報を送ることができ、相互に意見交換をすることが可能です。このような特徴を持つインターネットのグループ・コミュニケーションは、7年前の阪神淡路大震災の時に大変役に立ちました。被災地の人たちは当時、何度電話をかけても外部の人に通じない、直接会いに行こうと思っても交通が途絶えてそれもできない、また、手紙もすぐに書いて送れないという状況でした。マスメディアは、震災自体については報道してくれますけれども、被災地の個々の人の状況については報道してくれません。そのようなときに、インターネットを通じて被災地の人々は外部の人々とすぐに連絡をとることができました。例えば被災地で医薬品が不足していますという情報をインターネット上で流したら、全国から医薬品が送られてきたり、また、犠牲者の安否情報の問い合わせや、ボランティアの組織づくりにもインターネットによるコミュニケーションは大きな役割を果たしたそうです。それでは、このようなインターネットを利用したグループ・コミュニケーションは、どのように行なわれるのでしょうか。インターネットのグループ・コミュニケーションの形態として、ネット・ニュースとメーリングリストがあります。ネット・ニュースは、電子掲示板というふうにも言われます。インターネット上に様々な話題ごとに掲示板があり、自分のコンピューターからある一人が掲示板にあることを書き込みます。それが掲示板に表示されると、他の場所にいる人がまた自分のコンピューターから更にそれに対する意見を書き込んでいく。そのくり返りでどんどん話が進んでいって、意見交換がなされるわけです。先ほど言いましたように場所にはこだわりませんから、世界中の不特定多数の人たちの間で様々な意見や情報を交換することができるわけです。メーリングリストは、手紙を電子的に一度に多くの人に送る形態です。コミュニケーションをするグループの一つの名前、アドレスなのですが、そのリストをつくっておきまして、メンバーの一人が電子メールを指定されたアドレスに送りますと、自動的にメンバー全員にその電子メールが送られます。メンバーの間で

お互いに電子メールのやり取りが簡単にできるシステムです。今まででしたら、住んでいる地域や職場や学校など、日常生活で直接接触する範囲内の人々とのコミュニケーションが中心でしたが、インターネットを利用したグループ・コミュニケーションの場合、めったに会わない人や、あるいは全く会ったことのない人とコミュニケーションをする機会が増えます。年齢や性別や職業や、社会的な地位などにこだわらず、同じ興味、関心を持った人々が集まるネット・コミュニティが形成されるわけです。このようなインターネットのグループ・コミュニケーションはどのような特徴、利点、問題点があるのでしょうか。まず特徴として挙げられるのは、実社会での年齢や性別や、風貌や職業などに関する情報が得にくいということです。このことの利点として、年齢や性別や職業などが分かりにくいので、より対等のコミュニケーションが可能であるということが指摘されています。例えば高校生でもとてもいい考えを持っていらっしゃる方がたくさんいらっしゃると思うのですが、実際はその年齢のために、現実の社会ではなかなか真剣に話を聞いてもらえないということもあるかもしれません。しかし、インターネットの社会では、自分から言わなければ相手に年齢が分からないわけですから、書かれた文章の中身、内容だけで判断してもらえますので、現実の社会よりも大人と対等に扱ってもらえる可能性があるということがあるかもしれません。このような利点がある一方で、問題点も指摘されています。マスメディアや教育機関などからの情報は一般に信頼されるようすけれども、インターネット上の情報はどのような人からの情報か分からないため、裏づけがない単なるうわさ程度のものも多い。ですから、信用できるかどうか分からないという問題があります。例えば昨年11月から12月にかけて、ワン切りに注意しましょうという情報がインターネットを駆けめぐりました。このワン切り警告メールというのは、相手がまず自分の携帯電話に1回コールして切る。1回で切るのワン切りというそうすけれども、その後に携帯に着信履歴が残ります。それに電話をかけると、ダイヤルQ2のような音声が出て、その番号は有料ですので、大体10万円ぐらい後で請求される。そのよううわさがネット上で流れました。実際はこのうわさはネット上のデマだということが判明したのですけれども、この情報を信用した人も多いというふうに思われます。そして、何よりも驚いたのは、通信を総括する総務省や経済産業省までもが即座にワン切りに対する警告文をホームページに掲載したことです。ネット上のうわさにとどまらずそれが公的機関から出されると、一般の人々は本当のことだというふうに信じるために、社会的な混乱にも結びつきかねない、本当に考えさせられる出来事でした。インターネットのグループ・コミュニケーションの特徴として、相手の表情、身振りなどが分からないということも指摘されてきました。これを補うために、利用者は自分の表情、感情を表す顔文字などの記号表現をつくりだしてきました。こちらは日本式の顔文字とアメリカ式の顔文字を用意したのですが、何を表すかご存じでしょうか。まず日本式のほうですが、1番こちらはご覧のとおり笑っている顔なので、う

れしい、今日例えば道で 100 円拾ったんだよという後につけると効果的かもしれません。こちらはお分かりでしょうか。これが目で、これが汗なのだそうですね。冷汗をかいている顔なので、失敗したとかそういう意味を表すそうです。こちらは、目があって涙なので、悲しかったというような感情を表すそうです。これは日本独特のものなのだそうですけれども、こちらが両手で、顔が下にこういうふうに向いているそうです。ですので、失敗したとか、すみませんとか、よろしく願いますとか、そういうふうに向いている表情だそうです。次にアメリカ式のものなのですが、アメリカ式は四つ、どういう感情を表すかご存じでしょうか。よく分からないという方は、ちょっと頭をかしげていただくと分かるかもしれないのですが、これが目で、鼻で、口です。顔が横になっているわけです。こうローテーションをするとお分かりだと思うのですが、笑っている顔です。うれしいという意味だそうです。こちらは、目がちょっと下がっているので、ウインクをしている顔です。こちらは、口がへんの字になっているので、怒っている。こちらは、べろをベッと突き出している、そういうような顔文字だそうです。このようにネットの使用者たちは、自分たちの感情を表現する顔文字メールを発達させてきたのですが、それと同時にやはり問題点なども指摘されています。ネット上では他人と接しているという感覚が得られにくいために、相手の表情、あるいは反応というのが得られないわけですから、つつい配慮に欠けるメッセージを書いてしまって相手を不愉快にさせたり、それがどんどん、売り言葉に買い言葉ではないですがエスカレートして、最後にはけんかになってしまうというようなこともあるようです。インターネットを利用することによって、簡単に世界の様々な人々とコミュニケーションができるようになって大変便利になってきたのですが、今後インターネットをどのように利用していくべきか、また利用者のあいだでどのようなルールをつくっていくべきかについて考えていくことが大切だと思われまます。私からの発表は以上です。どうもありがとうございました。（拍手）

「若者はEメールでどのように気をつかうか」加藤 安彦

（配布資料：p. 14～15）

司会 次は、第1部の最後の話題になります。国立国語研究所の加藤安彦より、「若者はEメールでどのように気をつかうか」というお話です。ちょっと器材の入れ替えがございますので、少々お待ちください。

加藤 国語研究所の加藤です。よろしくお願ひいたします。ちょっと古いタイプの情報の装置を使いますものですからあれなのですが、私は「若者はEメールでどのように気をつかうか」というようなこととお話しようかと思ひます。今日こちらに参ります時に、電車の中でいろいろ見ておりましたら、一つのシートに必ず一人か二人、携帯をこのように取り出して、チャカチャカと親指をずうっと動かしている、それはもうすごい勢い

で動かしているという、そういう方たちを何人も見ました。常時、必ずシートに一人はそういう方がいらっしやって、すごい勢いで動かしているのですが、親指だけ動かしているという。日本語は変換しなければいけないので、なかなか難しいと思うのですけれども、英語だったらもっと便利かなという感じです。NOKIA（ノキア）という会社があるのですが、フィンランドの会社なのですが、フィンランドではキーボードを覚えなくて、先に親指1本で携帯のABCを覚えてしまうというので、そんなような悩みとか嘆きというか、そんなような話が聞こえてきたりもしています。携帯で一番使うのはメール、先ほども三宅先生のほうからお話がありましたけれども、メールでかなりいろいろなお友達とやり取りとか、あるいは今の杉本さんの話にもありましたけれども、一括してバツとたくさんの所に送ることができるというようなことで、個人的なものもあれば、あるいは案内のようなものも、最近でははがきで届くよりも随分メールで頂くようなことが多くなったかと思います。皆さん携帯は、携帯というくらいですから、いろいろな所へ持ち歩きが可能なわけです。ですから、いろいろな所で親指だけを動かして、手紙のやり取り、手紙といいますか、わざわざメールという言葉を使うということは、手紙とは違うというそういうことです。違う名前を使うということは、やはりちょっと違うのだらうという認識がその裏側にあると思うのですけれども、手紙とはちょっと違うのですが、「どこでもお手紙」というのですかね、ドラエモン「どこでもお電話」みたいなもので、どこでもお手紙という感じで、いろいろな所で手紙を打っている、メールを打っているということで、友達とやり取りをしているということだと思のです。そういう手紙の一種ではあるのですけれども、先ほど申し上げたようにちょっと種類の違うものだらうということなんですね。ですから、ちょっと以前、5年とか10年ぐらい前、パソコンとか大型計算機なんかを使ったメールのやり取りでは、「拝啓、加藤様」なんていうふうに始まるメールが結構あったのですけれども、最近ではほとんど用件をいきなり単刀直入に切り出している。「加藤さん、」というような形で、その後は用件がだぁと続くといったものが増えてきているかと思います。ですから、拝啓・敬具とか、前略・草々なんていうような形の挨拶言葉抜きで使っているということが多いかと思えます。特に最近、年配の方なんかは、若い人の言葉は分かりにくいとか、若い人の言葉はなっていないとかいうような、そのような話も聞こえたりするのですけれども、ましてや親指1本でチャカチャカやっているようなメールでは、挨拶言葉のようなものもぬきだし、あまり日本語がなっていないのではないかというような気持ちも起こってくるかもしれません。私が個人的に提供していただいた大学生のデータ、大学生の友人とのやり取り、友人といってもいろいろな種類の友人がある。そのお友達の中で、特に親しい親友と呼べるような人、親友とは呼べないけれどもかなり親しい人、あとはそのどちらでもないごくごく普通の友達というような、その3種類にメールを分けていただいて、親しい人に出したものを、あるいは頂いたものといったようなものを、親しさの度合いに応

じて分けてみました。言葉遣いがないかどうか、前略・草々とか拝啓・敬具なんていうのは、メールを集めてみたところ一つも出てきはしなかったのですけれども、顔文字ですとか、あるいは文末に使われる表現みたいなもの、これがちょっと面白い特徴がありましたので、それを御紹介したいというふうに思います。ちょっと先にご覧いただこうと思いますのは、先ほど杉本さんのお話にもありましたけれども、こんなような類いですね。一番上は泣いています。2番目の所は、真ん中の口の部分がちょっと上のほうに来ていると、ちょっとこんな感じになっているわけですね。右側のほうはもうちょっとにんまり笑っている感じ。こちらは汗をかいている状態で、十文字のようなプラスの記号のようなものがついている。これはどういう文章で出てくるかといいますと、「おやすみ」とか書いて書いてあるんですね。もう眠くてしょうがない状態になっているとか。下のほうは、「わ〜い」なんて書いてある所の後ろに出てくる。これは普通のJISコードと呼ばれるものの組合せで顔の形を作っているものです。この他に携帯には絵文字というものがあまして、セットとして用意されている。もうすでに笑っている顔がまるまるセットになっている。あるいは泣いている顔、あるいは食事だとかビールだとかお酒だとかいろいろな種類のもの、そういうものがセットになって、1文字、絵の文字になっているんですね。ちょっとそういうものはパソコンで出せないものだから、ここで示すことができないのですが、そのようなものを使っている。それを全部ひっくるめて絵文字類なんていうふうに呼んでみようかと思うのですけれども、私の手元の資料の所に、八つグラフをつけておきました。60名ぐらいの大学生の方からのメール、それを分析してみた結果をグラフにしてみたのですけれども。これは、親密度、今さっき申し上げたみたいに大変親しい、親友みたいな関係だということを親密度1、一番遠い関係、ごくごく普通のお友達というのが親密度の3ということになります。これは、絵文字類、先ほどもお見せした絵文字といいますか顔文字と、それから携帯の絵文字と呼ばれるような種類のもの、そういうものをどれだけ使っているかという出現の比率を、それぞれの親密度1, 2, 3で比較できるように数値を改めたもの。そうしますと、やはり親密度1、つまりとても親しい親友のような人にたくさん使っているということが分かります。これは、なるほどというふうに理解できるような話だと思います。次にお見せするのが、これはちょっと見にくいかもしれませんが、ここの所ですが、星印と音符のマークが書いてあるんです。星印と音符のマークというのは何かと申しますと、顔文字みたいに組み合わせたようなものとか、あるいは携帯の絵文字とはちょっと違って、JISコードってちょっと分かりにくいかもしれませんが、キーボードをいっぱい何回かたたいて星とか書いて変換すると、こんなふうに出てくる、そういう記号の種類なのですけれども、その星印とか音符というのが、若い人のメールに非常に特徴的にたくさん出てきたのです。その星印と音符が絵文字類として括るのですけれども、絵文字、顔文字、それから音符と星という、その中で音符と星だけをちょっと別に、別枠で立てて

みたのです。そうすると、それが全体のメールの中でどれくらい割合を占めているかというのを、親密度1, 2, 3で見ってみました。そうすると、音符とか星以外、つまり親密度1において音符と星がこんなに少ないところなのですけれども、親密度2, 3と、遠い関係になるほど、星印だとか音符を多用しているということが分かるんですね。逆に言うと、顔文字、絵文字の類いが親密度、親しいほどたくさん使っているという、そういうグラフなわけです。ですから、遠い人ほどどうも星印、音符というのを使っているみたいだということですね。どういう使い方をするかという、御手元の資料の所に書いてあるのですが、14 ページという所に、「そしたらすぐに教えてね」とか言いながら星印になっていたりする。あるいは、「そろそろ誕生日だね」と言いながら、音符の記号が出てくるというような、そういう使い方をするものです。星印、音符が多用される背景には、どうもちょっと遠い関係にある人については、顔文字なんかは、怒った顔、泣いた顔、笑った顔、もう見ればそのままですね。それが音符だとか星印だと、もうちょっと解釈の幅がある。つまり、解釈の幅があるから、遠い関係の人には多用する、そんなような関係があるかもしれません。次に、文章の終わりに使う言葉、「私が加藤だ」「私が加藤です」の2種類言い方はあるのですけれども、ほぼ「だ」と「です」が同じような形だと、同じところに出てくるというふうに考えます。「です」のほうが丁寧だという意識がありますが、若い人においてはどうでしょうか。「です」なんてほとんど使わないのではないかと見てみると、どうも親しい人には少なく、遠い関係にあるほど「です」を使っているということですね。「だ」は無かったでしたっけ。すみません、今日ちょっとどこかにOHPを落としてきてしまったらしくて、「だ」は御手元の資料を見ていただくと思うのですが、15 ページの真ん中の段の右側のほうですが、「だ」は親密度の1, 2, 3, それぞれ同じぐらいに使っているということです。「だ」は、非常に、友達とのやり取りにおいては標準的で、1, 2, 3, 親密度にかかわらず使う。ところが、「です」は、親密度、一番親しい人には余り使わない。むしろちょっと距離のある人に使う。ごくごく普通に、やはり若い人でも丁寧に言うということですかね、距離がある友達だと考えられる人には丁寧なもの言いをしているということが、それで分かるかと思います。次にお目にかけるのは、これはクエスチョンマークですね。クエスチョンマーク、びっくりマークもお目にかげようと思ったのですが、それもちょっと欠けている。クエスチョンマーク、「あした学校来る？」とかいうような所にクエスチョンマークがついているのですけれども、これは親密度、親しい人から徐々に下がっています。御手元の資料にあります、15 ページの一番下の段の左側、びっくりマークですね、エクスクラメーションマークといわれるやつですが、このエクスクラメーションマークの(棒グラフを示して)、階段になっている階段のなり方というのですか、ここの角度のつき方ですね。親密度1, 2, 3にしたがって、どういう階段状になっているのかをご覧くださいと、びっくりマークのほうはどうも階段の1段1段が高いという感じの

下がり方をしているかと思います。つまり、親しい人ほど使っていて、遠い関係にある人ほど使われ方が少ない。やはりこれは、びっくりマークというのか、エクスクラメーションマークというのかなりきつく響くのだらうと思うのですね。相手に対して。「学校来ないの」といってクエスチョンマークだったらいいのですが、「学校来ないの!」、びっくりマークとなっていると、ちょっと距離のある関係の相手にとっては、来ないのを責められているような感じがするかもしれませんね。エクスクラメーションマークを使われていることでちょっと、相手がひょっとすると誤解してしまうかもしれない、そういう恐れがあると考えて、それを外しているのだらうというふうに思われます。15ページの一番上の段の右側、これが一番くっきり若い方の意識があらわれているグラフではないかという気がするのですけれども、文末に、「よ」というのを使うんですね。「加藤だよー」とかいうやつですね。「加藤だよ」「加藤だよー」「加藤だよ〜ん」とか言ってしまふやつですね。私が「加藤だよ〜ん」なんて言ったら皆さんに失礼かもしれませんが、お友達同士のあいだでやる時に「加藤だよ〜ん」とか言うと、ちょっとおどけていて許せるかという感じがするわけですね。その「よ」と「よー」と「よ〜ん」というのを見ていただくと、一番左側が「よ」なのですが、これはやはりニュートラル、非常に標準的な使われ方をするというので、その白いのが親密度の3で、下にいくにしたがって親密度2, 1となるのですけれども、それを「よ」について積み上げると、それぞれ同じぐらいの割合で使われているということが見てとれるかと思います。「なんとかだよー」という、「よー」とちょっと延ばすやつは、親密度の3が非常に少ないんですね。「加藤だよー」とかいうことを、親密度の一番遠い人には使っていない。「加藤だよ〜ん」というやつが、とても親しい人と、一番距離のある人に使っているんですね。これはどういうことなののだらうと考えてみますと、どうも遠い関係にある人に対して「加藤だよ〜ん」と使うと、親しい人に対して「加藤だよ〜ん」と使っているように、あなたと私のあいだは距離があるように見えるけれども、実は近いんだよという表現をしたから、一番近い人に使う表現をそのまま、距離があると自分が考える、距離があるというよりもごくごく普通の友達だと思ふ方にも、その言葉を使うことで距離を埋めてやろうと、その距離感がむしろあるからこそ、親しい人に使う言葉を使っているのだなど、そういうことがこのグラフからいえるのではないかというふうに思うわけです。ですから、若い方たちがチャカチャカと親指を動かしたり、Eメールというやつ、今回のものは大学生から提供していただいたものですが、パソコンからも、あるいは携帯からも出されたメール、どちらも対象にしたものなのですけれども、若い方たち、言葉遣いあれこれ、前略・草々は使わないかもしれませんが、前略・草々、あるいは拝啓・敬具に相当するような、そういう気遣い、心づかいというのは、若い人同士のあいだでも実はあるのだということが分かった、あるいは今日いらした方々にも、若い方たちもそれなりに気を遣っているということを認識していただくとありがたいかなと

思いながら、こんなものを示しました。どうもありがとうございました。（拍手）

司会 以上で、第1部、4件の話題について御紹介を終わりたいと思います。それで、ちょっと予定より遅くなってしまって、今もうあそこの時計で3時20分となっていますが、予定どおり15分間の休憩をここでとりたいと思います。それで、この休憩時間中に、先ほど最初にも御紹介しましたが、黄色い質問票、これに今までに出てきた4件の話題について、何か御質問等ございましたらお書きください。一番上にお名前を記入する欄がございますが、もし差し支えがなければ、そこにお名前のほうもご記入いただきたいと思います。会場内にこういう緑色の名札をしたスタッフが何人かおられますので、お渡しください。ちょっと第1部のほう、進行が遅れてしまって申しわけございません。予定どおり、15分間ということで、開始は3時35分ということで始めたいと思います。なお、表のロビーの受付の隣側のほうに、国語研究所の様々な刊行物等を展示してございますので、もしよろしければそちらのほうもご覧ください。それから、受付の所に、数はちょっと少ないのですが、筆記具のご用意がございますので、お持ちでない方は受付でご記入ください。では、休憩に入りたいと思います。

< 休 憩 >

【パネル・ディスカッション】

司会 御手元の資料の中に、緑色の紙でアンケート用紙がございますが、これについては会の最後に回収させていただきますので、受付のほうにご提出ください。準備が整ったようですので、これより第2部を始めたいと思います。第2部は、第1部での話題を紹介して下さった4名の方に、国立国語研究所の山崎誠が加わりまして、5名でのパネルディスカッションという形で進めさせていただきたいと思います。では、よろしく願いいたします。

山崎 時間が押ししてしまった関係で非常に心細いので、早速話題に入らせていただきます。第1部のほうで、ネット・コミュニケーションに関する事例を4名の方々から御紹介いただきましたけれども、この会場に来ていらっしゃる方には、実際にパソコンをお持ちでない、あるいは電子メールを使ったことがない、携帯メールを使ったことがないという方がいらっしゃるかと思います。ちょっと今現状がどうかということ把握したいので、非常に恐縮なのですが、電子メールのご利用経験のある方、ちょっとお手をあげていただけますでしょうか。ありがとうございます。では、携帯でメールをご利用なさっている方、いらっしゃいますか。はい。先ほどよりはちょっと少ないですね。今この会場には、世代で言うと20代から30代、40代、もっと上のほうまで幅広い層の方がいらっしゃいますが、半分以上の方が電子メールをご利用になり、半分に近いぐらいの方が携帯のメールをご利用になっているということが分かりました。それで、ネット

社会がもっと進んでいきますと、持っていない人が肩身が狭いというようなそういうことになってくると困りますので、なるべく皆さんが便利で快適に、安全に使えるようなそういうような社会にするためには、どのようなことに気を付けていったらいいか、そういうことを念頭に置いて第2部の話を進めていきたいと思えます。まず最初に、ネット・コミュニケーションというのは、実際の生活でどんなところに役に立っているのか、こんなに便利な点があるということ、それぞれの方から紹介していただこうかと思、いろいろな事例なども集まっております。先ほど池田のほうで申しましたのは、年賀状は12月の25日ぐらいまでに書かないと間に合わないけれども、年賀メールだったら大晦日に書いても何とか間に合うとかいう、そういうことがありましたけれども、その他の事例などを、では順に池田さんのほうから御紹介いただけますでしょうか。

池田 年賀メールは年賀状より遅く出しても間に合うということもありますけれども、1月1日になったら零時に発信するということがかなり多いようで、会社のほうが控えるようにと呼びかけているということもあるようです。では、ネット・コミュニケーションがどのように役に立つのかということを見聞記事で見えます。例えば「75歳の妹とメールで交流」という記事では、80歳の大阪に住む方が、遠くに住んでいる75歳の妹さんとメールを使ってコミュニケーションをすることになって、楽しんでいる、また子供や孫からも「メールが使えるようになったかい」というようなやり取りがあつて、非常に楽しんでいるということが紹介されています。メールが遠隔地の人同士のコミュニケーションに役立つということです。他の新聞記事では、会話が苦手だけれども、メールだと直接に顔を合わせないで済むので、素直に自分の思っていることを伝えることができるという、メールならではの利点をあげています。それから、例えば耳が不自由な難聴の方で、それまではファックスでやり取りをしていて、読んでもらえたかどうか返事が来るまでに時間がかかっていたけれども、携帯メールを利用することによって、問い合わせをすると相手から返事が早く返ってくるようになり、また返ってきた情報をデータベース化することにも便利になって役に立つというような意見があります。それから、例えば携帯電話を使って、年齢を超えて、あるいは住んでいる場所を超えて、句会を楽しんでいるということもあります。今までは一つの場所に集まらなければできなかったものが、あるいはファックスですと時間がかかっていたものが、メールを使うことによって添削も可能になってくるし、皆で楽しめるというような例が紹介されています。

山崎 ありがとうございます。三宅さん、お願いします。

三宅 先ほども申し上げましたように、携帯というのは、持ち運びのできるパソコン、プラスの電話というふうに考えていただければ、その利用法というかい所が大体分かると思うんですね。例えば最近も遭難の事件がいくつかありましたけれども、雪山とかスキーとか、けがをしたとか、そういう時に即座に、これは電話の機能のほうがいいのですけれども、夜中でもメールも送れますし、そういう両方ができます。例えば大震災の

時にも利用できるということは大変強い機能だと思います。それから、海外との移動が多くなるのですけれども、その場合でも、外国にももう即座にメールが送れるようになる。これは電話でも携帯電話でもできるわけですが、例えば時差がありますと、私がちょうど都合がいい時に、海外で都合がいいかどうか分からないんですね。個人的に私、子供が今海外に二人いるのですが、授業中に電話をかけるわけにはいきませんから、メールを打っておきますと、向こうの都合のいい時に戻ってくるという、そういう時差、時間を考えなくていいということがある。それから、ちょっと言い方を注意して言いたいのですが、人間関係構築の補助をするという言い方をしたいんですね。人間関係をよくするというふうに言うのではなくて、例えば家族のあいだでメールで交換できたり、同報メールを送る、同じメールを家族の皆に送って、今日はこうだよということを確認しあうとか…人間関係が悪い状態ではつくりにくいのですが、よくしようとか、いいものを保とうとした時に、大変効果的に使えるのではないかと思います。それから、これはメールの、携帯のインターネット機能というか、マルチメディア的な機能なのですが、リアルタイムの情報が得られる。例えば、先日もテレビでやっていましたが、ノリの養殖をしている人が、その日の潮の満ち引きのあれをメールで、携帯で調べることが簡単にできます。それから、そろそろ始まる花粉情報なんかも、毎日見ることができますし、車でやっていたナビゲーションを携帯でとることもできる。それからもう一ついえば、大変パーソナルなメディアなので、口では言いにくいこと、対面では言いにくいことというのに大変よく、うまく使うことが可能なんですね。例えば愛の告白を携帯ですると、パーソナルにもらった気がして効果的であるとか。それから、なかなか仲直りができないものを、ちょっと携帯で入れることによって気分がほぐれるとか、悪い面もあるかもしれませんが、そういった、いい使い方というのがたくさんできると思うので、そちらのほうに私たちは、生活をよくするために使っていけば、大変いいメディアではないかと思います。

山崎 ありがとうございます。杉本さん、お願いします。

杉本 私は、グループ・コミュニケーションの教育利用ということから二つ、事例を御紹介させていただきたいのですが、まず最初に、アメリカで 80 年代の終わりに、一番最初に教育の現場でグループ・コミュニケーションというのが取り入れられて成功した事例は、ろうあ者の学生さん、生徒に対してでした。健常児の場合ですと、先生が話して生徒が答える、あるいは生徒同士で話すということは簡単に自由にできるのですが、ろうあ者の場合ですとなかなかそれが難しい状況だったわけです。そこで、LAN、インターネットではないのですが、ローカルな、教室の中でのコンピューター同士を結びつけるという、LANというふうにするのですが、ネットワークを通じてお互いに、一人の生徒が一つのコンピューターの前に座って、先生が質問をして、それで生徒が答える、あるいは生徒同士で、さっき言ったことについて、どういうことですかという質問

をして答える、そういうことで対話が進んでいく、それで、ろうあ者の作文能力も向上していくということがありまして、非常に成功しましたので、アメリカで健常児の作文の教育にも、コンピューター・ネットワークが取り入れられるようになったという事例があります。もう一つの事例ですが、遠隔学習に役立つということがあります。アメリカは国土が広いので、学校まで通うのに何時間もかかるという方も中にはいらっしゃいます。そうした場合、学校に通いづらい、あるいは近くの学校に行っても、自分が受けたカリキュラムというものがちゃんと用意されていないという場合もありますので、家にコンピューターがあって、ネットワークにつながっていさえすれば、最近では遠隔地学習者用のいろいろなカリキュラムが組んでありますので、家にいながらにして素晴らしい、例えば大学のとりたい授業なども参加できて、グループ・ディスカッションにも参加できるという、そういうことがあります。私は日本語教育部門におりますので、日本語教育の事例ですと、現段階ではまだそれほど実用化されていないのですが、中国や海外で日本語を学びたい、けれども実際のネイティブの日本人と話す機会がそれほどないという方がたくさんいらっしゃるのです、今後、テレビ会議のような形で、日本人が日本にいて学習者は中国や韓国やその他外国にいて、直接対話をしながら皆で日本語を学んでいくというそういう可能性もあるわけです。

山崎 ちょっとここで、今の杉本さんのお話に関連して、会場から質問を頂いているので、もしこれにお答えいただけたらと思うのですが。「聴覚障害者の方々はほとんど携帯メールを使用していますが、その人たちの意識調査などはされたことがありますか。また、今後その予定などは」というのを頂いておりますが、いかがでしょうか。

杉本 私個人としては、聴覚障害者に特化した調査というものは今のところやっておりますが、今後、いろいろな方に対してどのような影響を与えるのかということをお調べることが大変重要だと思いますので、今後の課題にしたいと思います。

山崎 ありがとうございます。では、加藤さん、お願いします。

加藤 最後に、皆さん、ほぼ私の考えているようなことをおっしゃっていただいているのですが、情報の共有ということですね。同時に情報を共有できる。全く同じものを、全く同一の情報を同時に共有できるというのが、やはりメールの一番特徴だろうというふうに思うんですね。手紙をもし書いたとした時に、例えば5人、10人に仲間うちで連絡をとらなければいけないと、5人のメンバーにいちいち書くと。1枚、2枚程度のものを10人分書くのだったらそれほどのことではないのですけれども、それが100人であるとか、あるいは200人であるとかいった数になってきますと、これを手紙で全部手書きでやっ払いこうと、カーボン紙を使ったところで、随分大変になってくると思うんですね。それもまた、手紙で書いてカーボン紙を使ってというふうな話になると、カーボン紙で書かれた人にとっては、何でカーボン紙のが私のところに来るんだというような話になってしまうかと思うのですが、メールですとそういうことはありません。要は、

ネット上から配られてきたものを、文字を、文字列をJ I Sコードで表されている、それを読むと。しかもそれがもしパソコンがついていて、ネットに入っていれば、皆さん同時に、同じ時刻に、要は先ほどの三宅先生のお話ではないですけども、地球の裏側ですと同じ時刻という時刻は違いますけれども、ほぼ同時にその情報を共有することができる。その部分が非常に特徴的で、優れた点であろうと思うのです。同じものをいくつもコピーして同時に配ることができるという、そこが非常にメリットとしてあると思います。それからあと、人間関係の補助ということを三宅先生がおっしゃったのですけれども、例えば電話ですと、夜分遅くにすみませんとか、朝早くからすみません、お休みのところを申しわけありません、今日なんか、お休みの方もいっぱいいらっしゃると思うのですけれども、お休みのところをお出かけいただいてありがとうございますということもあるのですが、メールですと、夜分遅くにすみませんって、いつ読むかわからないのに、夜分遅くにすみませんというのはおかしいと。それは手紙でももちろん同じなのですが、ただ、今自分が書いている時点が夜であって、それを出した途端に向こう側にもう、向こう側がパソコンをつけている、あるいは携帯を手に持っているという状態であれば、その情報がある場で見られると。夜分遅くにすみませんということなのですが、メールですと夜分遅くにすみませんを書かなくても許されるということがありますね。その意味で、ルーズととらえればルーズなのですが、人間関係がその分ちょっと余裕を持ったというか、人と人との関係がちょっとゆるやかになって、その分スムーズにコミュニケーションがとれる部分ということがあるのではないかと、その二つが一番、私、特徴的ではないかというふうに思っています。

山崎 ありがとうございます。今、ネット・コミュニケーションの便利な点をあげていただきましたけれども、便利なだけではなくて、皆さんのご発表の中にもありましたように、相手に対する配慮ですとか、あるいは情報の信頼性とか、そういう気をつけなければいけない点、コミュニケーションの手段ですから、相手あってのことなので、どういう時にどういう人に何を伝えるかという、その辺を配慮しなければいけないという点、そこで気をつけなければいけないということで、エチケットということがよく言われているのですが、インターネット上のエチケット、平たく言うとマナーにあたるようなことなのですけれども、対人的配慮について、インターネット、あるいはこのネット・コミュニケーションというのは新しい手段で、まだ慣れていない段階ではどういうところに特に気をつけたらいいかという、そこにとまどうことがあるかと思います。このポスターに、「上司にメールは失礼か」というようなものがあつたと思いますけれども、例えば目上の人に対して何か情報を伝える場合、どういうところに気をつけたらいいのか、ここで目上を持っている方というと余りあれなのですが、大学ではそれほど上下関係はないかと思いますが、どなたがいいのですかね。

三宅 では、私は「目上がある意味で、いない」と言っては年上の先生から怒られるかも

しれませんけれども、一応そういう関係にはないのです。学長とかそういう方もいらっしやるかと思えますけれども。そういう目上というか、やはり大変気を遣わなければいけない相手にメールを、携帯メールを出すということを考えてみた場合、やはり携帯メールというのはそういう方に対しては向かないだろうと。それは、先ほどから携帯の特徴を言ってきましたことと関係があるのですけれども、まず、携帯メールというのは大変小さい画面で打ちまして、余り長い情報を伝えるというのには向かないですね。そうしますと、そういう上司に何か情報を送るということになりますと、大抵は何かちゃんとした情報であって、「今何してる？」というふうなことは送らないわけですから。そうしますと、携帯ではちょっと合わないだろうと。やはり、もしメールで送るとしても、パソコンのほうのメールで送るだろうと。その場合にもやはりかなり考えなければいけない問題がいくつかあると思えますけれども。携帯メールというのは、そういう目的には合わない。それからもう一つ、やはり携帯はパーソナルです。そして上司というのを私たちは、ある程度の距離を置かないといけないというふうに認識していると思うんですね。そういうところでメールでポンとこう送るようなことをしますと、相手にもよるけれども、やはり失礼になることが多いと思うので、携帯メールに関していえば、余り適したメディアではないのではないかと。自分ではほとんど使いません。

山崎 ちょっと似たような質問が来ておまして、「パソコンでメールを入れるのですが、それはどの程度の敬語使いなのでしょうか、事務的ですっきりという文で相互に理解し合えるという前提でよいのでしょうか」。一種のマナーに関してのことだと思うのですが、先ほど加藤さんが親密度ということをおっしゃっていましたので、敬語をどれぐらい使ったらいいのか。もちろん相手との関係もあるのでしょうかけれども、事務的ですっきり分かればいいのか、それともある程度、最小限、よろしく願いますとかそういうことは必要なのか、その辺はどうお考えでしょうか。

加藤 そのこのところが、やはり新しいメディアといいますか、書き言葉による新しいコミュニケーション手段という性質がメールにあるということに関わってくると思うのです。今、相手によってということもありましょうがというお話でしたが、まさにそのとおりで、真っ先に、まず見ず知らず、あるいは初めてメールで連絡をする相手、ほとんど口をきいたことのない相手に出す時には、大変丁寧な、いわゆる手紙文と同じような、拝啓まではいかないにしても、それと同じぐらい、同格ぐらいに丁寧なメールを出すのがまず第一であろうと思うんですね。その代わり、相手が目上の場合とか、あるいは相手が、自分との関係で何かお願いしなければいけないような立場の方にそのメールを出した場合、大変堅苦しいかもしれませんが、手紙と同じような型どおりのものをまず送ってみると。そこから先が、新しいコミュニケーション手段ということにながらるのですが、相手が就業時間中といいますか、仕事をしている時間中だと、大抵すぐに、あるいはその日のうちに相手からメールが、返事が来ると思います。相手先が、

非常に相手の方がざっくばらんな方であれば、そんなに肩ひじ張らないで、もっとリラックスした文章にしましょうという意味合いで、そういうメールが返ってくると思うんですね。私なんかはそういうのが、余り使うのが上手ではないものですから、むしろ堅苦しくない文章をついつい書いてしまって、それがいけない部分があるかもしれないのですが、相手がちょっと肩ひじ張らないでもっとリラックスしましょうやという文体で来たら、それに応じて合わせるのがエチケットではないかという気が私はするのです。相手が随分くだけた調子で返事を返してくれたにもかかわらず、自分がまた、手紙文の、手紙のよくある例文のような返事を返すとすると、やはり相手にとっても余り気持ちのいいものではないのではないかという気がするんですね。むしろそういう時には、相手にちょっと合わせて、自分のしゃっちょこぼった形のもをもう少し崩してみる。そういう返事を返すということが多分、礼儀というのか、むしろその方が人間関係にとっては非常にプラスになるメールの書き方なのではないかと。ですから、相手によって、相手がもうはなからくだけた調子である、だんだんくだけてきた、ではこちらもだんだんくだけていこうというふうに、相手にある程度合わせるのがエチケットではないかというか、こういうメールを使う時の、一つ心しておくほうがいいことではないかというふうには私は考えています。それから、ついでに申し上げると、パーティなんかでいろいろと職業のことであるとか、身の上のことをあれこれ、自分のポジションは今こうであるとかいったようなことを言うてはいけないとか、余り話題にしてはいけないというようなことがあると思うのですけれども、そういう不特定多数の人が集まっている所でそのような話をする、そういうのは避けたほうがよろしいというのと同様に、メーリングリストというのがあるのですが、メールを使って、ある一つのことについて皆さんで話し合いをしましょう、あるいは、ある学会なら学会、ある句会なら句会、そのメンバーが登録されていて、ある人がその句会宛に出せば、句会の皆さん全員が読む、あるいはある学会の皆さんが全員読むというようなメールの使い方があるのですが、そういうところではやはりむしろその手の話題を避けるというような、何か敬語とはちょっと外れてしまいますけれども、何かそういうエチケットみたいなものもあると思うんですね。すみません、ちょっと外れたところの話をしてしまいましたけれども、そんなところが私は気にかかっているという話なのですけれども。

山崎 先ほど私が申し上げたエチケットというのは、インターネット・ユーザーのあいだで、おのずとできてきた自発的なルールと聞いておりますので、今のお話にも関連があるかと思えます。そのエチケットというのは、普段、コミュニケーションがスムーズにいつている時は多分気にしないのしょうけれども、何か失敗があったり、それがルール違反を、自分なり相手なりが侵してしまった時に、何かそこでトラブルのもとになるかと思うのですけれども、そういう失敗談なり、勘違いとか思い違いとか、そういう経験をもしお持ちでしたら、杉本さん、御紹介いただけますでしょうか。

杉本 事例としていろいろとそういうのを集めているわけではないのですが、私が個人的に、大失敗まではいかないけれども誤解されたなというようなことが何度かありまして、やはり先ほども言いましたように、感情表現がどうしても文章だけからではうまく表せないで、こちらの意図と反したふうに相手に解釈されたということがあります。そうすると、あ、失敗したなというような細かい経験が積み重なって、エチケットにつながるのですが、電子メールで文章を書く時には、日常使っている言葉よりもより丁寧に、よりへりくだって書くというのがまず一つ、私自身、そうしなければいけないなというふうに思っております。あと、ずらずらと長く書いたのでは返事をもらえないというような経験が過去に何度もありましたので、たとえそれがすごくいい意見でも、皆さん読むのがちょっと大変だからパスということがあると思いますので、細かく分割して、何行かごとにスペースを入れ、しかも簡潔に分かりやすく書くというように、次第に使いながらルールを身につけてきたということがありますね。

山崎 ありがとうございます。池田さんは何かそういう、成功例でも失敗例でも、ありますでしょうか。

池田 エチケットとは少しずれるかもしれませんが、杉本さんと同じように、私が最近メールを送る時に気を遣っていることでは、なるべく簡潔に書くということ。相手が自分の都合のいい時にメールを読むとしても、時間が限られているとか、忙しい人を相手にすることもありますので。それから、タイトルだけで全体の内容がおおよそ分かるようなタイトルをつけるということ。それから、長いメールなのか簡潔に終わるメールなのかということを最初に分かるように、長くなってすみませんというようなことを付けたりしています。

山崎 エチケットということは、多分、相手に対する配慮とかで、配慮をするためには、ちょっと想像力を今まで以上に働かせないと、自分がその情報を送った相手は今どういう状態にいるか、寝ているか起きているかとか、忙しいのかとか、そういうことも配慮しながら情報を伝えていって、返事が来ないけれどもどうしたのよと、ものすごく心配になるというような、余り敏感に反応をしない、大らかな気持ちでというのが今のところは必要なのかもしれませんね。ちょっと時間の関係で、皆さんから頂きました質問をいくつかこちらで御紹介してお答えしていこうと思います。これは、「PCメール、携帯メールの人気は、外国ではどのような状況でしょうか」と。恐らくパソコンのメールと携帯のメールの比率というか、海外ではどれぐらいの使われ方なのかという御質問なのですが、どなたかこういう情報をお持ちでしょうか。三宅さんはイギリスから帰っていらしたばかりだから。

三宅 パソコン・メールというのは、もともと日本からではなくて、アメリカを中心としたところから多く発達して日本に入ってきたわけですが、携帯というのは、日本の進歩がすごく大きかったですよね。それで、NTTとかそういうところから世界にも出てい

くということがあったのですが、ここ数年結構、海外のいろいろな所に行く機会が多くて、大体ヨーロッパですけれども、町の中とかいろいろ見ていましたら、やはり最近携帯のメールが多くなってきているんですね。去年ヨーロッパのいくつかの国へ行った時、町の中で携帯電話をかけている人が多かったです。日本人と違って、向こうの人は結構大っぴらに言いますから、「そういうことはいけません」とか電車の中で言われていたり、「こういうのが困るんですよね」というふうに私に同意を求めていたりとか、そういう風景がありました。ただ、使い方として、今も社会学系の人や世界何カ国も調査をしているのですけれども、やはり日本のような、特に若者のこういういわゆる実況中継みたいな、そういう使い方までは至っていないことが多いんですね。ヨーロッパでも随分使われていますけれども。ですから、こういうコミュニケーションのあり方というのは、かなり面白い日本の現象ではないかと思います。先ほども言いましたけれども、子供がイギリスにおりまして、見えますとやはり、「今どうしているの」みたいなメールを結構送り合っているのですけれども、個人的な印象ですけれども、日本人ほどの頻繁なやり取りというのはいないように見受けました。

山崎 では、質問をあと二つばかり御紹介したいと思います。今、杉本さんと加藤さんの御手元にある質問を、どちらからでも御紹介いただけますか。

杉本 インターネットに共有のものなのですが、ご質問いただいた内容は、「携帯メールと机上のパソコン・メールとでは違いがあるのでしょうか、メール書式のエチケットは決まったものがあるのでしょうか」ということと、あともう一つ、「欧米のメールは、欧米でも手紙の形式にのっとっているのでしょうか」という御質問を頂きました。前半は三宅先生にお答えいただきたいと思います。

三宅 メールといっても本当にその部分ではかなり違うと思うんですね。まず、携帯ではまだ文字制限というのがあって、長く書いてもいいのですけれども、すごく読みにくいのと、それから文字の長さによって料金が違うんですね。なるべく短く出すというのが、これは一つのエチケットになっているようで、長くなるのだったらパソコンのほうにいくという傾向が若者の中でもあるようです。それで、そういうわけもありまして、それこそ拝啓とか何とかとか、私だよとかいうのも書く必要はなくて、それはなぜかというのと、相手のアドレスが出ますから、誰から来ているかって大体分かるわけですね。ですから、そういうのがないことが多くて、最後も、例えば私でしたら三宅とか普通は打つのが当然なのですけれども、それから私は所属とか、インターネットではつけていますけれども、もう携帯の場合は本当にもう内容だけというふうになっていることが多いと思います。そういうのはやはり、パーソナルなコミュニケーションが携帯メールでなされている一つの表れだと思いますけれども。いいですか。

杉本 私は、欧米の中でもアメリカで電子メールをやり取りしましたので、アメリカということでお話させていただきたいのですが、アメリカでも日本でも、やはりよく似てい

るのではないかと思います。つまり、手紙に非常に近い形式で電子メールを書かれる方もいらっしゃるし、もっとフランクに、「ハイ、フォークス」という形で始まって、じゃあね、という形で、「バイ」という形で終わる、もっと話し言葉に近いようなメールを書かれる方もいらっしゃいます。それは、相手、あるいはメールの内容によって違って来るわけです。ですから、欧米のメールは手紙の形式にのっとっているともいえまじし、やはりのっとっていないとか、話し言葉にもっと近い形にもなっているというふうにもいえると思います。

山崎 加藤さん、お願いします。

加藤 頂いた御質問は、「携帯電話によるEメールは、文字数制限や料金に関係するので短文にする傾向が強いが、親密度によってどの程度違うのか」ということです。私が個人的に提供を受けたデータで、親密度によっていろいろと見てみたのですが、これは当たり前前といえば当たり前なのですが、パソコンを使った、パソコンを介したメールのほうは、携帯のメールの2倍、3倍、4倍といったあたりの長さのものがああります。それは、キーボードでずっとパシヤパシヤとたたき続けることができますから、パソコンのほうの方が長いということがああります。携帯メールは短文にする傾向が強いというお話ですけども、携帯に限った話だとしますと、親密度によってという観点からは、やはり携帯ですと親密度が近い、近しく感じる、近い関係だというふうに思われる、親しい親友のような関係というような人に出したメールというのは、非常に短いものが多いです。むしろ近いほど短いメールになっていると。ツーといえばカーという言葉があありますけれども、ツーカーな関係だから、こんなことをちょこちょこっと書いただけで相手には理解できると。あるいは、もっといけば、メールで本当に親しい人にはちょこちょこっと書いて相手に送ると、相手が今度はメールで短く返してくるのではなくて、もう直接電話をかけて、電話で話をしてしまうと。そのほうが手っ取り早いという部分があると思うのですけれども、その両方を使えるという意味で、非常に携帯というのは便利だと思うのです。私のデータの中では、親密度が高いほど、要は親しいほど短めになるという傾向がああります。こういうことでよろしいでしょうか、御質問を頂いた方。

山崎 ありがとうございます。ちょっと時間が押してきましたが、最後に池田さんのほうから面白いコメントがあありましたのでこれを御紹介して、何か御仕事の関連でご意見を頂ければと思います。読み上げます。「新聞では、携帯の使い方を知らない若者、マナーの悪さを指摘する報道が多いことはご存じのとおりですが、一握りのマナーの悪い人のためにすべての人がそう思われてしまう気配がああります。もっと携帯を良い意味で使っている人たちもアピールして汚名を晴らしていただきたいと願う、携帯反対者の一人です」という意見があありますが、この新聞記事の携帯のマナーについてはいかがなのでしょう。

池田 今日の資料で紹介した携帯についての記事ですけども、新聞に掲載された中から

部分的にとっているということもありますし、新聞に掲載される際にも新聞社の配慮などがありますので、新聞記事からだけで世の中の動きを把握することはできないということをもっと押さえておきたいと思います。さて、確かに新聞記事の中には、携帯利用のマナーの悪さを指摘する声はありますけれども、一方で、携帯メール等を利用することによって、今まで関わりの薄かった人たちとネットワークをつくっていくことができる、人間関係の輪が広がったというような好意的な見方もあります。例えば夫婦間ですとか親子間など、対面するとなかなか話ができないのだけれども、メールという手段を介することによって頻繁にやり取りして、今何を考えているのか分かるようになってくるというようなことです。普及は著しいですけれども、まだ時間が余りたっていないメディアですので、これからは、どういうふうに使おうと、利用する人すべて、あるいは利用しない人にとっても、豊かな情報化社会をつくっていくことになるのかということをもっと考えながら、ルールづくりをしていくことが大事なのではないかと思います。

山崎 ありがとうございます。今池田さんがおっしゃってくださったようなコメントが、多分この会の総括というようなことにあたるのだと思います。時間配分が非常に不手際でした、第2部は本当はもっと長く用意していたのですが、皆さんの質問にも全部お答えすることができませんでしたことをお詫びいたします。それでは、第2部はこれで終わりたいと思います。ありがとうございます。（拍手）

司会 以上をもちまして、第8回「ことば」フォーラムを終了したいと思います。本日はお休みのところを多数御参加くださりまして、ありがとうございます。進行の不手際により、本日はちょっと時間を超過してしまいましたこと、また会場の方から頂いた質問のすべてにお答えできなかったことを改めてお詫び申し上げます。なお、最初にご説明いたしましたが、受付でお配りした資料の中に、こういう緑色の紙のアンケートが入っております。国立国語研究所では、年に5回、このような「ことば」フォーラムを開いておりますが、次回以降のフォーラムをよりよくするための参考にさせていただきたいと思いますので、是非ご記入のほうをよろしく願いいたします。受付のほうに筆記具等のご用意も多少ございますので、もしお持ちでない方は、そちらをご利用ください。受付に回収箱が置いてございますので、提出の上でお帰りくださいますようお願いいたします。本日はどうもありがとうございます。（拍手）

<終了>